

田舎の女学生として

八女郡広川町 野中 勝美

憧れの女学校に入学したのは昭和18年の4月である。日に日に戦火は拡大し、第二次世界大戦の真只中に突入しつつあったものの、日華事変から父も帰還して家にいたので、生活の危機感はまだなかった。

村の国民学校から進学したのは5人だった。1年1組に入ったのは私一人だったのがちょっと心細かったが、両親からは人絹(スフ)のできた制服、万年筆、通学用の自転車(もちろん中古品)を揃えてもらい、入学式の折には真新しい教科書、紙製のランドセルも手にすることができたので大変嬉しかった。新入生としての胸のときめきを十分味わうことができた。

入学後は授業時間も一応確保され、国語・漢文・文法・数学・物象・生物・人文地理・英語・礼法・家政・被服・保健体育・音楽・書道・図工があり、内容は、国語は古事記からとったもの、図工の時間にはグライダー・竹製のスプーン・ホークを製作したり、被服の時間には活動着(モンペ)・足袋・下駄の鼻緒を作った。体育では短棒投げ・砂を2個のバケツに入れて両手に持って走る重量運搬競争、数学・生物以外はどの教科も戦時色に彩られたものばかりだった。

この生活もわずか2ヶ月で終わった。6月の農繁期を迎えると、出身校区の役場前に集合し地区担当の先生と上級生の指導で班編成がなされ、地区の出生兵士の留守宅に農作業の手伝いに行った。

非農家育ちでたいした仕事もできなかったと思うのに、「今日はごんしゃん達が来てくれなはったので、助かった、助かった。」

と、夕ごはんまで御馳走になったこともあった。(「ごんしゃん」=「おじょうさん」、
「来てくれなはった」=「来て下さった」。-柳川地方のことば)

真白なごはん、筍とじゃが芋の煮物、青菜の和え物、今でもお婆さんの笑顔とともにはっきり憶えている。

『勤労の旗翻し麦を刈る』 3年生だった姉の句である。

2学期になると活動着が制服となり、家を出るときからモンペに下駄履きの姿だった。それでもまだ空襲がなかったので、片道13kmの自転車通学には危機感はなく、それなりの楽しさと苦労があった。

朝は山峡の九十九折の道を町の女学校まで一気にペダルを踏み、帰りは4kmごとに休みをとりながら岩間から湧き出している清水を露の葉で飲んだり、汗ばんだ顔を洗ったりしておしゃべりを楽しんだ。

一番の苦労は自転車の故障で、チェーンがはずれたりタイヤがパンクしたりした。中古の自転車の上、舗装されていないガタガタ道なので、自分のがパンクしないときは友達のがパンク

するといったふうで、パンクには毎日のようにつき合わされた。

ある日、一級上の人自転車が迷走し始めた。びっくりして見守っていたらなんとハンドルの支柱が朽ちて折れたのである。運動神経が秀れた方だったので大事には至らなかった。

11月の終わりには父が再び出征していったので、日々厳しさを増す戦況とともに、毎日父の安否を気づかい生活も苦しくなった。この頃から校舎の中も慌しくなる。講堂、雨天体操場に多くのミシンが備えられ、落下傘の用布、軍服の部分縫いが上級生の手で始まった。下級生は戦闘帽の穴かがり、服のボタン付けをするようになり、田舎の女学校も軍需工場の一部を担うようになった。

2年生になると戦局は一段と厳しくなり、6月にサイパン島、7月にグアム島の玉砕により本土空襲が次第に現実化してきた。校庭では風船爆弾の風船の紙の部分（和紙をこんにやく糊で張り合わせる）作業が上級生の手で早朝よりなされていた。

その頃本土決戦に備えてか、八女の西部の台地に飛行場が作られていた。地区の中学校、女学校にも動員がかかり、時々整地作業に行っていた。下級生の仕事は2人組でモッコの土を運んだり、石拾い、草取り等の軽作業だった。この頃になると古い自転車は使えなくなり、友達には親戚に下宿、私は一人バスで通学するようになった。

その日は秋も終わり頃だったと記憶する。作業が終わり、先生の引率で3km強の道を歩いて帰校、明日の諸注意を受けて1km弱程のバス停に駆けて行く。『あー、5時過ぎのバスに間に合っただけよかった』と一息つくのもほんの一刻、バス停には乗車を待つ人が溢れていた。

時刻よりだいぶ遅れて来たバスは、始発の久留米から満員の乗客を運んできた。降りた人の数だけ乗せて走り去った。多くの仲間が取り残されたので安心感もあったのか、次のバスまで1時間待つことにした。が、次のバスも「最終のバスも乗れるかどうかわかりませんよ」の言葉を残して走り去っていった。当時久留米―八女間は電車が走っていたのでそれを利用する人が多く、八女でバスを降りる人は少なかった。みんなは「そんなら歩かにかしよんかたい」とぞろぞろ歩き始めた。

6時を過ぎた町はとっぷり暮れ、燈火管制下のため、各家庭からは一条の明りも漏れてなくまっ暗な道、家まで13km…。先導者に遅れないように必死について行った。「よか連れでございませう。さようなら。さようなら」4km程歩いて10人ぐらいに、8km程歩いて4、5人に、10kmになると知り合いのおじいさんと2人に、まもなくおじいさんとも「一人で大丈夫かい」「はい大丈夫です」と言葉を交わして別れた。いよいよ一人、家までは、まだ3kmはある。途中杉山が迫っている場所、人家が途絶えた所、家に向かってひた走りに走った。昼間の疲れは忘れ勝手口までダッシュ、「ただ今」と駆けこんだとたんどっと涙が溢れ、家族が見守る中いつまでも声を上げて泣いた。

この体験は鮮明な体験の一つである。上気した顔に冷たかった晩秋の風、水たまりに足をとられたときの感触、背中で鳴ったランドセルの音、今も私の五感にはっきり残っている。

学徒勤労令が施行されてからは校内での軍需作業、地方の軍需工場、農作業に動員され、級

友と別れ別れになった。

11月に東京が空襲されてからは日夜をとわず空襲を受けるようになった。

3年生の8月11日のこと、田の草取りの作業中空爆のサイレン、急いで近くのお宮さんの杜に駆け上り、解除になるまで震えていた。標的からはずれたため難を逃れたが、4km程離れた場所では、軍の物資を運んでいた友達等は機銃掃射をまともに受け帰らぬ人になった子もいる。まもなく終戦、田舎の女学生とはいえ命にかかわる貴重な体験と回顧する。